

目標と評価を活用して教育を行う スウェーデンの学習評価の特長と課題

1990年代から、全国共通の目標と評価基準を設定して、資質・能力ベースの教育を推進しているスウェーデン。高校や大学の入学者選抜では、主に中学校や高校での成績を基に選抜が行われる。そのため、同国は、国内すべての学校が同じ評価基準で成績をつける仕組みを整え、公平性や信頼性の担保を図っている。同国の教育について研究する金沢大学の**本所恵**准教授に、同国の学習評価の特長と課題について聞いた。



金沢大学 人間社会研究域学校教育学系
准教授

本所 恵 ほんじょ・めぐみ

京都大学大学院教育学研究科博士課程修了(教育学)。日本学術振興会特別研究員などを経て、2012年より現職。専門は教育方法学、カリキュラム論。スウェーデン・ウツサラ大学教育学部客員研究員などを歴任。「北欧教育研究会」に参加。著書に、『スウェーデンにおける高校の教育課程改革―専門性に結び付いた共通性の模索(新評論)』、『北欧の教育最前線―市民社会をつくる子育てと学び』(共著、明石書店)など。

試験はなく、学校の成績で 上級学校への合否が決まる

まず、スウェーデンの進学制度についてお話しします。同国では、義務教育である基礎学校(10年間、*1)を修了後、ほぼ全員が高校(3年間)に進学します。基本的に入学試験はなく、大半の生徒が希望する学校・学科に入学します(図1)。高校卒業後の希望進路が大学進学・就職のいずれでも、学びたい学問や将来の職業を見据え、学科を重視して選択するのが一般的です。高校の学科は、大学の専門分野や社会の産業を反映して細分化されています(*2)。

大学進学の際にも入学試験はなく、多くの生徒が希望の大学・学科に入学します。志願者が多い大学・学科では入学者選抜が行われますが、合否の材料は高校での成績です。高校・大学とも、スウェーデンではそれまでの学校の成績によって選抜される点が、1回の入学試験で合否が左右される日本の制度との大きな違いと言えます。

整備されたシステムを生かし、 指導・学習評価を創意工夫

次に、スウェーデンの基礎学校や高校における学習評価についてお話しします。同国では、1990

年代に学校教育改革が行われました。以前は、教育の内容や方法が具体的かつ詳細に定められていましたが、新たな制度では、各教科の教育目標と評価規準を定めて、詳細は教師の裁量としたのです。

2000年代にはPISA(*3)の影響もあって学習評価に関する議論が盛んになりました。ナショナル・テストの教科や学年が増加し、学校教育庁が定める全国共通のナショナル・カリキュラムには、教科ごとに教育目標に対応する評価基準が定められました。教師と生徒が各教科の目標と評価基準を共有することで、教育目標の達成に向けた指導・学習改善が行いやすくなったのです。

22年に行われた基礎学校のナショナル・カリキュラムの改訂では、各教科で育成を目指す資質・能力が示され、より資質・能力ベースの教育になりました。示された資質・能力は、日本のものと比較すると、他者がいる現実的な状況の中で、学んだことをどう用いるかという視点が強く意識されています。

*1 2018年に就学前クラス(0年生)が義務化され、10年間となった。 *2 高校の学科には、卒業後に大学進学を目指す学科として、自然科学、社会科学、人文、経済、芸術、技術の6学科が、各職業分野の基礎を学ぶ学科として、建設・設備、輸送機器・運輸、手工芸、自然資源活用、ホテル・観光、福祉・介護などの12学科がある。同国では、生涯学習の機会が保障されているため、高校進学時の選択の結果によって、その後の人生が決まってしまうわけではなく、後に専門分野を変えたり、転職したりすることが可能な社会システムが構築されている。 *3 経済協力開発機構(OECD)が行う生徒の学習到達度調査。

図1 スウェーデンの学校教育 日本との主な違い

- **授業** ナショナル・カリキュラムで定められた各教科の教育目標、育成を目指す資質・能力、評価基準を基に、教師が指導計画を作成して実施。
- **教科書・教材** 検定教科書はなく、教材は、教師が教育目標に合わせて選択。
- **成績** 国内のすべての学校が、ナショナル・カリキュラムに定められた評価基準に準拠し、A～Fの6段階で成績をつける。成績をつけられるのは、教員免許を持った教師。なお、成績を受け取るのは、小学6年生から。成績を6段階とするのは、義務教育から成人教育まで、すべての教育段階で共通。
- **評価基準** A・C・Eの成績をつけるための全国共通の評価基準が定められている（図2に評価基準Eの例）。BはAとCの間、DはCとEの間、Fは不合格。例えば、Cの基準はすべて満たすが、Aの基準は一部満たさない場合はBとなる。そうした判断は教師に委ねられている。
- **評価材料** ペーパーテストやパフォーマンス課題など、多様な形式での成果物が評価材料になりうる。全国悉皆のナショナル・テストにおいても、グループ課題やテーマ課題など、多面的な評価が試みられている。
- **高校入学** 基本的に入学試験はなく、多くの生徒が希望する学校・学科に入学。入学希望者が多い場合、基礎学校での成績で選ばれる。
- **大学入学** 生徒が希望の大学・学科に申し、高校での成績に関する要件を満たしていれば入学することができる。志願者が多い大学・学科では、高校での成績、あるいは入学試験の結果などを基に選抜が行われる。

※本所准教授への取材を基に編集部で作成。

図2 スウェーデンの9年生(中学3年生)数学科の目標と評価基準

目標 数学科の授業では、生徒が以下の能力を発達させる条件を与えなくてはならない

- 数学的概念及び概念間の関係を使用し、説明する力
 - 計算を行い、単純な問題を解くために、適切な数学的方法を選んで用いる力
 - 数学を用いて問題を定式化して解決し、その選択した解法を評価する力
 - 数学的に推論したり、それをたどったりする力
 - 問題設定、計算、結論について、話ししたり、実施したりするために、数学的な表現形式を用いる力
- **評価基準E**
- 生徒は、数学の概念と使用方法に関する基礎的な知識を示し、数の理解と数の利用、代数、図形、証明、統計の分野における概念及び概念間の関連を説明し、関連と変化を満足のいく確かさで説明する。
 - 生徒は、数の理解と数の利用、代数、図形、確率、統計及び関数と変化の分野において、計算をしたり、単純な問題を解いたりするために、主にはうまくいく数学的方法を、満足のいく確かさで選んで用いる。
 - 生徒は、単純な問題を解く。生徒は他の方法を提案することに何らか貢献する。問題解決において、生徒は、文脈に適用できる簡単な数学モデルを定式化したり、それに貢献したりする。生徒は、簡単な方法で戦略や結果の妥当性を評価する。
 - 生徒は、簡単な数学の議論を提示したり、それに応答したりすることを通して、数学的推論を行ったり、それをたどったりする。
 - 生徒は、主にはうまくいく方法で思考過程を説明して話し合い、記号やその他の数学的表現形式を用いる。

上記は、評価基準Eであり、A・Cでは、下線部の文言のレベルが変わる。例えば、「生徒は、数学の概念と使用方法に関する（A：とてもよい／C：よい／E：基礎的な）知識を示し」となる。

※スウェーデンの9年生の数学科のナショナル・カリキュラムの一部を本所准教授が翻訳。それを基に編集部で作成。

学習評価は、全国共通のナショナル・カリキュラムで定められた各教科の評価基準に準拠して行われ、成績はA～Fの6段階です（図1）。評価基準の記述は簡潔で、A・C・Eのみが示されます。BはAとCの間、DはCとEの間で、どの基準を満たしているかの判断は教師に委ねられています。検定教

科書もなく、教師はナショナル・カリキュラムが定める教育目標の達成に向けて、自身の裁量で指導と学習評価をデザインすることができるのです。スウェーデンの学校教育は、整備されたシステムを前提に、教師の創意工夫が生かされるところに特長があります。教師の裁量の

政策の成果はデータで検証し、国を挙げて改善サイクルを回す

高校では、科目によって履修期

学習評価の材料は、ペーパーテ

範囲が広いことで、教師が指導や学習評価のあり方を自分たちで考え、話し合い、改善していく土壌ができています。

間が異なるため、履修科目の修了時に総括的評価が行われ、教員免許を持った教師の責任の下で成績がつけられます。進学の際には、前段階の学校の成績が選抜の材料となるため、成績証明書や卒業証書には公的文書としての重みがあります。



写真 スウェーデンの学校教育庁ウェブサイトには、学習評価を行う際に参考となる、多くのコンテンツが掲載されている。https://www.skolverket.se/

ストの結果やパフォーマンス課題の成果物などです。入学者選抜の資料となる成績には公平性・信頼性が強く求められるため、全国共通の評価基準に加え、成績の全国的な比較を可能にするために、複数の教科・学年では悉皆のナショナル・テストが行われています。さらに、例えばは数学のテストでは、育成したい資質・能力の観点から、グループで取り組む課題や特定のテーマに沿って集められた課題を出すなど、多様な出題形式が用意されています。

また、学校教育庁は、学習評価に関するウェブサイトを設け、パフォーマンス課題を例示したり、

学習評価を行う際のアドバイスをしたりして、教師の実践を支援しています(写真)。

以上のように、学習評価の公的な枠組みは整備されていますが、成績の公平性や信頼性については議論の余地があり、活発に議論されています。各学校のナショナル・テストの成績など、教育データへのアクセスは容易であり、関係者がデータに基づいて議論できる環境も整っています。また、政策の成果をデータを基に検証したり、新しい政策はモデル校で試行してから実施したりと、国を挙げてPDCAサイクルを回しています。そうした取り組みは、日本の教育行政にも参考になるはずです。

学年末課題に、6コマをかけて取り組む

スウェーデンでのパフォーマンス課題の一例をお伝えします。ある高校では、2年生が文化・美術史の学年末課題として、美術史から1つの時代を選び、時代背景とアートの特徴に関するレポートを

作成して、口頭発表する課題に取り組んでいました。その課題には6コマ分の授業が充てられ、教師はレポートのサマリー指導や、先輩が作成したレポート・プレゼンテーション資料の例示などを行っていました。

評価対象は、レポートやプレゼンテーション資料といった成果物に加えて、友人との議論や課題に取り組む姿勢など、多様なパフォーマンスです。その結果によつて成績がつくわけですが、学んだことを他者に伝えようと試行錯誤する中で表現力が磨かれるなど、日本の探究学習と同様に、課題に取り組む過程そのものが生徒の学びになっています。

なお、子どもが成績を受け取るのは小学6年生からです。以前はもっと遅く中学2年生からでした。成績提供の早期化の目的は、子どもに早めに目標と課題を意識させ、学習意欲を高めることにあります。ただし、子どもにストレスがかかることへの懸念や、教育効果の面からの反対意見も多く、今も議論が続けられています。

学習動機やニーズによって、学習者自身が目標を設定

最後に、私のスウェーデンでの学習経験をお話しします。同国の成人教育機関には、基礎学校や高校の科目を学び直せる講座があり、私は高校レベルのスウェーデン語講座を受講しました。その時、最も驚いたのは、学習者自身が評価基準を読み、自分の学習動機やニーズに応じて目標を設定することでした。受講理由によつて目標は異なつて当然という考えから、教師からは目指すべき目標が提示されませんでした。一番よい成績のAを目指すのが当然だと思つていた私は驚きました。

教師のフィードバックの内容も、学習者が設定した目標に応じて変わります。AならAの、CならCの、目標に到達するための助言をするのです。学習動機やニーズに応じた指導をするのは合理的かつ効果的だと思つました。そうした指導や学習評価のあり方は、日本の学校教育にとつても参考になる点があるのではないのでしょうか。